
アキハバラ君日記

神村律子

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

アキハバラ君日記

【Nコード】

N6706I

【作者名】

神村律子

【あらすじ】

僕は秋葉原光義。要領の悪い男。

僕は秋葉原光義。

その苗字から会社の同僚達に「オタク」とあだ名されている事を知っている。

酷い話だ。

確かに僕は、スポーツが苦手で、マンガ好きで、美少女アニメに目がなくてガンブラが好きだけど、決してオタクではない。

何故なら、オタクの聖地である秋葉原には一度も行った事がないからだ。

その話を同僚達にすると、

「それはまずいよ。早く参拝しないと、バチが当たるよ」
などと言われ、からかいのネタにされる。

そんな僕だけど、会社の仕事はキッチリこなしている。

どこからもクレームをつけられた事はない。

どちらかと言うと、優良社員に入るはずだ。

しかし、生来の要領の悪さから、同僚の失態を僕の責任にされてしまう。

前にも、同僚の目黒由利子さんが発注ミスした鋼材の件で、目黒さんは、

「秋葉原君に確認してもらって先方にお送りしたんですけど」

などと平気で言い訳した。僕は課長に呼びつけられ、皆の前で叱責を受けた。

横目で目黒さんを見ると、ニヤニヤしていて、全く悪びれた様子がない。

腹が立ったが、目黒さんは部長の愛人という噂があるので、あまり事を荒立てられない。

僕はストレスが溜まる一方だった。

目黒さんに責任転嫁されたのは、一回だけではない。

そんな事を数えるほど執念深くないし、几帳面でもないの、正確には何回かわからないが、片手では足りないくらいのはずだ。

お詫びにデートくらいしてくれてもいいと思う。

そう。

僕は目黒さんが好きなのだ。

彼女に言えないのは、それが最大の理由。

部長の愛人だろうと関係ない。大好きだ。

彼女は性格に問題があるけど、美人で明るいから、そのマイナスを補って余りあるのだ。

バカだと思う。

絶対に実らない恋なのに。

そんなある日。

僕はまた要領の悪さから、一人残業を押し付けられ、会社にした。

もう十時だ。今日は金曜日なのに、一人でいる。

同僚達は、飲み会だと言っていた。

ああ。何か、涙が出て来た。パソコンの画面が滲んで見えない。

その時だった。

「だあれだ？」

と突然目を覆われた。

「え？」

その声に聞き覚えがあった。何で彼女が？

「目黒さん？」

「せえかあい！」

目黒さんは陽気な声で言った。振り返ると、ほろ酔い顔の目黒さんがいた。

「何よお、アキバ君、何か文句がありそうねエ？」

目黒さんはその可愛らしい唇を尖らせて言った。

「べ、別に文句なんかないよ」

僕は慌てて言った。

「どうしてよ？」

「え？」

突然目黒さんが泣き出した。

ええええ？ 「どうしてよ」は君の方だよ、目黒さん。

「どうしていつも私に何も言わないで、自分だけで怒られてるのよ？」

目黒さんが何を言いたいのか、よくわからない。

「カッコつけるな、アキバア！」

いきなり抱きつかれた。酒乱なのか？

「カッコつけてなんかいないよ。僕が怒られてすむのなら、それでいいから……」

僕は目黒さん突き放して説明した。目黒さんはまだ泣いていた。

「バカ。不器用にも程があるぞ、アキバア！」

「ごめん」

僕は笑って言った。すると目黒さんも釣られて笑った。

「ごめんは私の方。アキバ君、ううん、秋葉原君、今までごめんなさい」

「あ、いや……」

改めてそんな事を言われると照れ臭い。

「でも、何でなの？ どうして私に何も言わないのよ？」

「君が好きだから」

うわ、言っちゃった。目黒さんはビックリした顔で僕を見ている。

これで呆れられてしまうな。そう思った。いや、キモいって言われそうだ。

「そうなんだ。私の片思いじゃなかったんだ……」

今何て言われたの？ 聞き取れなかった。

「私も秋葉原君の事が好きよ」

「……」

僕は頭をハンマーで殴られたかのような衝撃を受けた。

えええ？ 目黒さんが僕の事を好き？

好き？ S U K I ? スキ？ すき？

「良かった。ありがとう、秋葉原君」

そう言うのと、目黒さんはフロアを出て行ってしまった。

僕はその後しばらく呆然としていたため、仕事を片付け終えたのが一時過ぎだった。

そして月曜日。

幾分冷静になった僕は、あの日の出来事は目黒さんが酔っていたからだと結論付けた。

フロアに行くと、目黒さんがいた。

「おはようございます」

普通に挨拶をかわす。

やっぱり彼女、覚えていないようだ。

その方が気が楽でいい。

我ながら思い切った事を言ってしまったと後悔しているのだから。

結局その日一日、目黒さんとは会話をかわさないまま過ごした。

そしてまた僕は一人残業。

同僚達は定時退社。課長が出張なので、皆早く帰ったのだ。

「あーあ」

溜息が出た。何でこんなに要領が悪いんだろう？

その時だった。いきなり目を覆われた。

「だあれだ？」

「え？」

また目黒さんだ。でも、今日は飲み会はないし、まだ七時前だ。

「目黒さん」

「正解！」

振り向くと、目黒さんがいた。やっぱり綺麗な人だ。

あれ、目黒さん、怒ってる？

「何よお、私の事好きって言ってくれたはずなのに、私が現れても全然嬉しそうじゃないのね」

「え？」

覚えてたんだ。うわあ、気まずい。

「さ、どこかで食事しましょ。フレンチがいいな」

目黒さんは僕を強引に机から引き離した。

「ちょ、ちょ！ 片付けるから、待ってよ」

「はい」

妙に素直な返事にドキッとする。

「はい、行きましょ」

僕は仕事を途中で投げ出し、強引なデートに行った。

翌日、主任に怒られるだろうけど、かまわないや。

もしかして、恋？

僕にもそんな事が巡って来たのかと、とても驚いている。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6706i/>

アキハバラ君日記

2010年10月21日23時26分発行